

<h1>おくのほそみち</h1> <p>～ グラデーションの中で ～</p>		10

小学五年生の時だったと思う。なぜか友だち2人に脇腹を全力でくすぐられていた私は、床をのたうち回りながら笑い転げ、それから逃れようと必死だった。何がそんなに、と今なら思うが、とても楽しかった記憶がある。

教室の床を転げながら逃げまどっていた私は、何とか教室の出入り口にまでたどり着き、上半身を廊下に投げ出すように後ろに転げ倒れた。その瞬間、今まで経験したことのない衝撃が頭に加わった。男の子たちが車いすを全力で乗り回すという遊びをしているところだった。私は、その車いすと絶妙なタイミングで衝突したのだった。あまりに痛かったのと突然すぎる衝撃に驚き、涙も出なかった。周りのみんなは「保健室いく!？」などと騒いだが、私は状況を飲み込むこともできず、「大丈夫だいじょうぶ」と返し、ふらふらしながらトイレに向かった気がする。

「障害は個性である」という言葉を耳にしたことがない人は、少ないのではないだろうか?あなたは、この言葉に対してどのような印象を受けますか?私は、じっくりくるようなこないような気がしている。ど

ちらかと言うと、じっくりこない派である。まだ最後まで読み切っていないが「増補新版 人間の条件 そんなものない」(立岩真也著、2018)という本を読んだ。新曜社から出版されている中学生以上のすべての人に向けた「よりみちパン!セ」シリーズの一冊だ。どんな本だった?と聞かれるととても困る。「中学生でも読める本なんやから、難しいことを簡単にわかりやすく書いてくれてるんやろ～」くらいに思って、手にした本だったが大間違いだった。あと何回は読まない、この本の内容を人様に紹介できるようにはなれないように思う。ただ、また読まなきゃいけない本だとは思っている。

なぜ、人に内容紹介もできない本のことを話題に挙げたかという、この本を読んでいるうちに今回のマガジンに書きたい内容が決まってきたような気がするからだ。本当にそうなのかは私にもわからないが、そんな気がしている。

今回のマガジンでは、「障害は個性である」に隣接していると思われる私が今まで触れてきた、障害(ひとまず表記としてはコレを使用するが、表記をどうするのかは悩ましい)、個性、得手不得手、苦手、得意、不得意などに関するエピソードを書いてみよ

うと思う。また、「そうは言ってもねえ～」と思う部分もあるため、そのことについても織り交ぜていければと思う。

【 目が見えない人 】

小学一年生の時、何を通してなのかは忘れたが、世の中には目が見えない人がいて、杖を頼りに歩いているということを知った。たぶん「へえ～」くらいにしか思わなかったのだけど、「目の見えない人が杖を頼りに歩けるんやったら、目の見える自分は目をつぶっても杖なしで歩くことはできる。自分にだってできる！！」と思った。そして、小学校の帰り道に友だちとバイバイしてから、その日は目をつぶって家まで帰ることにした。すぐに出来るというか、いつも通り帰られると思っていた。いつもと違って見えない中で歩くだけと思っていた。でも、目をつぶった瞬間に「あれ？」となった。急に怖くなったのだ。さっきまでそこにあった家の外壁がわからなくなり、自分がまっすぐ立っているのかどうかも怪しくなった。目を開けて壁を確認してから目をつぶってまた開けた。何度か繰り返してから目をつぶり、一步踏み出してみた。また「ん??」となる。いつもの一步がよくわからなくなる。歩幅もそうだし、真っ直ぐ前に出せているのかどうかもわからない。なんとなくふらつく気もする。その日は、初日だからと自分ルールを勝手に作り、普通に帰った。

翌日からは、家まで目をつぶって帰ることに挑戦する日々が続いた。途中で心が折れたり、早く帰りたいかたり、誰かがいたりして挑戦しない日もあったが、比較的真面目に取り組んだ。でも、どんどん自分ル

ールは増えていったし、もともと目の見えない人と自分は違うと言い聞かせたり、でも途中で自分の目が見えなくなったらこりゃ大変だなと思ったりもしていた。

何日かして、どんなに頑張っても友だちとバイバイしてから家までの距離を目をつぶったまま帰るのは無理だとわかった。だったら、目をつぶったまま真っ直ぐ歩く練習をしよう、目をつぶったまま次の電柱まで歩く練習をしよう、目をつぶったままぐるぐる回って元の方向を向いていられるように練習しよう、目をつぶったまま真っ直ぐジャンプする練習をしよう、などと色々した。どれもほとんど上手くいかなかったし、怖さとちゃんと出来ない苛立ちから薄目を開けてしまうズルを自分ルールのくせに許容できず、これだったら出来るんじゃないかということを考えてはやってみる日が続いた。一人遊びのようだったけど、出来ないと悔しい負けず嫌いが厄介だった。

で、結局、やっぱり無理！！となった。今日の挑戦を最後にしようと思ひ、自分に課した挑戦内容は、簡単すぎないけど頑張ったら出来るだろうというものにした。社宅の駐車場まで約 10m。真っ直ぐ歩いて、右に曲がって、左を向くと正面に駐車場のシャッターがあるコース。目の前に社宅がある場所からのスタートだった。色々試していたため、これが結構難しいことだとはわかっていた。でも、自分に足りないのは、度胸と自信だと思っていたため、今日こそはできる！今日で最後だからズルはしない！！と決めて望んだ。

何度も歩くコースを目で確認し、イメージしてから目をつぶった。まずは、真っ直ぐ進むのみ。いつもは途中で薄目を開ける

けど、今日は頑張ると決めていた。けど、無理だった。でも、薄目はズルだから一回はめっちゃ目を開けて見てもいいという新たなルールができ、あえていつもより大きめに目を開けた。自分が思っていた以上に手前だった。‘やっぱりなあ〜’と、それがわかっていたかのように思った。そこから残りの直線はどれくらいかを確認し、再び目をつぶった。自信を持って、怖がっちゃだめだと言いつけさせた。薄目を開けたくなかったが、やめた。いつもは自分が思っている以上に進んでいないことが多いから、まだいける、いけた、まだいける、いけた...を何回か繰り返した。さすがにもうあかんやろ...と思ったが、たぶんまだ手前だ。あと一歩で右に曲がればきっとちょうど良い感じになってるはず。そう思って最後の一步を前に出した。「あれ？」と思って反射的に目が開くと、目の前にはフェンスがあった。そして、フェンスが急速に上に上がっていった。なんだかわからないが、痛くて、怖くて、驚いて、泣いた。

泣きながら起き上がろうとした時にやっと状況が飲み込めた。フェンスが急速に上に上がっていったのではなく、本当のところは、私が下に落ちたということがわかった。あと一歩と踏み出した足は、蓋のないドブにスッと吸い込まれ、私とランドセルは上手にそこに挟まった。大声で泣きながら這い上がった。私のはまったところには、オロナミン○の瓶が粉々に割れていた。幸い、擦り傷程度の怪我で済んだが、大泣きだった。社宅の目の前だったため、そのまま家に向かおうとしたが、泣き声を聞きつけた隣の家のおばさんが外に出てきた。「そんなに泣いてどうしたの？」と聞かれたが、

泣きすぎて答えられなかった。とりあえず早く帰りたいのだったが、おばさんは‘ぬいぐるみをあげるから来なさい’と言った。早く帰りたくて仕方なかったからそのまま帰ろうとしたが、あまりにおばさんが家に来いと言うから行った。

そのおばさんの家の靴箱の上は、ぬいぐるみで溢れている。ぬいぐるみに興味を持たずに育った私にはそんなに嬉しくないのだけど、行かないとおばさんが納得しないような気がして家に行った。社宅からはほんの少しだけど遠ざかった。相変わらず大泣きの私だったが、玄関に入らせてもらい大量のぬいぐるみを目の前にすると「どうせもらうんやったら欲しいのをもらおう」と意地汚さが出てきて厳選した。そのころには、ほぼ涙は止まり、ヒクヒクしてる程度だったが、擦り傷はジリジリと痛かった。よくわからないけど、一番気になったペンギンのぬいぐるみをもらって帰った。小さめで、家にあっても邪魔にならないだろうとも考えた。おばさんは、何か元気づける声を掛けてくれたが、傷の手当てとかはしてくれなかった。でも、嬉しそうにしていたのは覚えている。たまに会うとぬいぐるみをくれる不思議なおばさんで、それまでも何回もぬいぐるみをもらっていた。あまり嬉しくないのだけど、くれると言うならもらっとこうと、何回ももらった。

その日もお礼を言って家に向かった。玄関を開け、母親を見た途端に涙を思い出して泣いた。ドブにはまったと言って大泣きした。落ちたところに瓶が割れていたと言うと母親は驚いたように私の体をみたが、擦り傷しかないことがわかり、「これくらいなら大丈夫」と言った。私が手に持つぬい

ぐるみを見て「またもらってきたん？」と聞かれ、それにうなずくと良かったねと言われた。少し落ち着いてからなんでドブにはまったのかを説明し、バカだと呆れられた。この挑戦については、人に話すのがなぜか恥ずかしく、母親にも話していなかった。少し話そうとした日もあったが、話の途中で危ないからやめなさいと言われて、それから秘密にしていた。呆れられたのに対して‘やっぱりな’と思う一方で納得できず、今までの数々の挑戦について熱弁し、ドブにはまる瞬間のフェンスが上に上がっていった不思議な感覚についても話した。でも、夕食の準備で忙しい母親は、たぶん半分くらいしか聞いてなかったと思う。その日を最後に私の挑戦は終わった。たまに、再挑戦することもあったが、それまで以上に自分に課す挑戦内容はハードルが低く、自分ルールも自分勝手になっていった。

大人になってからもたまにあの日々のことを思い出す。何を通して目の見えない人の存在を知ったのだろうか？隣の家のお婆さんは、何者だったのだろうか？もし目が見えなくなったらどうなるんだろう？なにか出来なくなるとしたら、何だったら一番生活に支障がないんだろう？などなど。ただ、今あるモノがなくなると、不便になったり、新しい何かに慣れなければいけなかったり、何かと大変なんだろうな～とは思う。

【 ‘私’ と ‘友だち’ 】

小学一年生の頃、ほぼ毎日遊んでいたのがもこちゃんだった。そして、遊ぶのはもこちゃんちだった。何度か自分の家に誘ったこともあったが、断られたような気がする。ただ、確実におもちゃはもこちゃんち

の方が多かったし、もこちゃんのお母さんは毎回お菓子を出してくれるし、自分の家では遊べないおもちゃで遊べるのも好きで、遊び場はもこちゃんちがほとんどだった。外で遊ぶ日もあったが、それでも待ち合わせはいつももこちゃんちだった。

暑い夏の日、もこちゃんちのお風呂で水風呂に入ろうとなった。幼稚園のプールの頃からもこちゃんが水に顔をつけるのが苦手とは知っていたが、水泳を習っていた私には理解できなかった。二人で仲良くちやぷちやぷ遊んでいるうちに、今ならもこちゃんの顔に水をかけるくらいならしても良いんじゃないかと思い、私は少しずつ掛け合いっこする水の量を増やし、少しずつ水を掛ける位置を上げていった。私の思惑はすぐにもこちゃんにバレ、もこちゃんの「やめて！！」という声も徐々に大きく、強くなっていったが、おかまいなしで水を掛けた。結果的に、顔に少しだけ水が掛かったところで「もうッ！！！！やめてッ！！！！」と、もこちゃんがぶち切れて終わった。ぎゅっと目をつぶり、両手で顔にかかった水を力いっぱい払い落とすようにしながらキンキンする声で言われた。ちょっとこちらが半笑いで引いてしまうくらいのガチ切れだった。

大人になってからこのエピソードについて母親に話したことがある。人生で初めて人にキレられたエピソードとして、おもしろおかしく話した。母親は「へえ～」と笑った。そして、「ももちゃん、なんか持っているっぽかったしね～。お母さんは、そう感じてたけど」とも言った。母親の目から見ると、もこちゃんは人と接するのが苦手な印象があったらしい。確かに、人前で話す

のは苦手そうだったけど、人と接するのが苦手な印象はなかった。でも、私が誰かと遊ぶ約束をした後にもこちゃんに誘われた時、一緒に遊ぼうと言っても毎回寂しそうに少し怒ったように断られた。たまに、よくわからないけど機嫌が悪そうな時もあった。もこちゃんが自分以外の人と遊んだ話を聞いたことはなかった。でも、もこちゃんのお誕生日会にはクラスの男の子と女の子の何人かも招待されて来ていた。いつもは、もこちゃんと2人きりが多い部屋にたくさんのお友だちがいるのが不思議だったけど、お誕生日会は何だか特別で、楽しくて嬉しかった。

小学二年生になる時に、私は父親の仕事の都合で引っ越した。それから、もこちゃんとは何回か年賀状をやり取りしたくらいで、もう連絡はとっていない。数年前に家族旅行で当時住んでいたところの周辺をまわった。もこちゃんチには、当時と変わらない表札があった。でも、なんだか恥ずかしくて、なんとも自信がなくて、前を通り過ぎた。昔は、玄関前で「も～こ～ちゃん、あっそび～ましょ～！！」と大きな声を出していた。

転校先の学校は、少し綺麗で生徒の数も倍ちかくいた。教室や校庭の大きさは、今までより少し大きく、どれも小洒落ている印象を受けた。前の小学校では、みんなランドセルを背負っていたのに、新しい小学校の半分くらいの子は、ランドセルじゃない自分の好きな鞆を使っていた。それが羨ましくて、私も少ししたらお姉ちゃんから使っていない真っ青な斜め掛けの鞆をもらって小学校に行った。真っ黄色の紐でそれなりに派手な、今思えばそれなりにダサイ

鞆だったが、結構気に入っていた。

新しい学校は、友だちの感じも違った。前の学校では、みんなそれぞれが時々に応じて楽しんでいたのだが、新しい学校では、グループが出来ているようだった。今思うと私自身が成長したから見え方が変わっただけかもしれないし、その年頃の女の子くらいになると仲良しグループっぽくなるのが普通なのかもしれない。ただ、転校のタイミングもあったため、新しい学校はちょっと違うという印象があった。それでも、どこか特定のグループに入るようなことはなく、何かを意識しすぎることなく、それなりに楽しみながら過ごした。学校が終わる前に誰かと放課後に一緒に遊ぶをして、家に帰るとすぐにその子の家や待ち合わせ場所に走った。私が自分から誘うのは、2～3人の子のうちの誰かで、自分から誘う時はその子と2人で遊ぶことが多かった。数人の子と遊ぶこともあったが、それは誘われた時くらいで、やっぱり誰かと2人が多かった。

学年が上がるにつれて、私も仲良しグループ文化に慣れていった。でも、どこかで居心地の悪さも感じていた。ちょっとしたいじめはあるし、ちょっとしたではないいじめもあった。いじめっ子といじめられっ子がローテーションしていくのを見ていた。いじめられっ子役がなかなか回ってこない自分も、中途半端にいじめっ子役になる自分も、どちらも好きじゃなかった。放課後に誰かと2人で遊ぶことはなくなった。それだけでなく、放課後に誰かと遊ぶこと自体が少なくなった。一週間のうち、週に二回は書道教室、週に三回はミニバスの練習があったから、遊ぶための時間が少なくなっ

たこともある。でも、それだけではないだろう。いや、それだけではなかったと断言できる。習い事がない日は、一人でバスケの練習をする事が多かった。たまに、何人かと近所のゲームセンターにプリクラを取りに行ったりもしたけれど、今日は早く帰らなきゃいけないと言ってみんなより早く家に帰り、一人でバスケの練習をすることもあった。思い返すと、遊びでどんなに遅く帰ってきても、夜ご飯までの数分だとしても、一人でバスケの練習をしない日はなかったように思う。雨の日は、家の中で綺麗に拭いたボールに触れたり、玄関でドリブルの練習をしたりしていた。私にとって、一人の時間は必要だった。

今も時間の過ごし方は、あまり変わっていないように思う。でも、昔より快適に過ごせている。そうじゃない時もあるが、それなりにやり過ごせるようになったし、それがそんなに大切じゃないこともわかった。

「みんな仲良く」、「ひとはみんなのために。みんなは一人のために」。当たり前とされることばかり言う人も、私のことを「いい子」だと言う人も、あまり好きじゃなく、そんな自分が好きじゃなかった時よりも今はずっと、もっと良い。

【 運動神経 】

私は、運動神経が比較的好い方だと思う。幼稚園の時から水泳を習い、小学生になるとサッカーやバスケのチームにも入った。父親とキャッチボールをするのも好きだったし、体育でもラケット競技以外ではたいがい活躍できた。

父親がお休みの日は、一緒に外で遊ぶことが多かった。日頃の練習の成果を見せよ

うとリフティング対決をした。小学三年生くらいの時の私の最高回数は、確か100回ちょっとだった。当時の父親の最高回数は、15回くらいだった。しかも、明らかに上手じゃない感じのリフティングだった。父親は「今日は調子が悪いなあ～」と言う日もあれば、「けいこは凄いなあ～」と言ってくれる日もあった。お父さんにも勝てる、と嬉しかった。

幼稚園からしていた水泳では、進級テストのたびに級が上がり、小学校に上がる前にはクロール、背泳ぎ、平泳ぎを習得していた。平泳ぎの級にいた時は、同級生はおらず、一番の仲良しは小学四年生の女の子だった。その子の平泳ぎは、手をかくタイミングと足をかくタイミングが合わなかったり、早すぎたりして、なかなか前に進まなかった。「もっとびゅーんって伸びた方がいいよ」と生意気にもアドバイスをしていたが、それを聞いた後のその子の泳ぎは、それまでよりずっと気持ちよさそうだった。

大学生の時、地元の駅に着いてから家に向かうバスに乗ろうと歩いていた。すると、後ろからドタバタともジタバタともバタバタとも言えない足音を立てながら走ってくる人がいた。前を向いていても、その人の走り姿が見えるようだった。私は、半笑いになりながら歩いた。そして、どうしてもそれを見たくなくなった。ダメだと思いながらも我慢ができなかった。何かを思い出した振りをして後ろを向いた。違う方向に視線をやり、視界の片隅で見られればと思った。だが、その人は私の視界のど真ん中にアピールしてきた。私が振り向いた瞬間、驚いた顔をしながら手を振ってきたのだ。せっかく半笑いを押し殺して振り向いたのに、

思わず吹き出してしまった。嬉しそうに、驚きながら手を振って走ってきたのは、私の姉だった。衝撃だった。色々な意味で、衝撃でしかなかった。「なんでわかったん!？」と無邪気に聞かれ、素直に振り向いた理由と自分が受けた衝撃を伝えると、はにかんだように笑いながら、いや怒りながら肩を小突かれた。「走り方、教えてるか？」と笑いながらであるものの、それなりに真剣に言ったのだけど、姉にはピシヤリと断られた。私は、二人の姉と比べると勉強が出来る方ではなかった。勉強は、そんなに好きでもなかった。二人の姉は、センスの差こそあったものの、勉強に対して真面目に取り組んでいたと思う。私には、それが足りなかった。でも、やりたくなかったし、好きじゃなかったから、別に良いやと思っていた。

【 バナナボート 】

中学校の修学旅行先は、沖縄だった。私は、人生初の沖縄を密かに楽しみにしていた。山に囲まれた町で育った私にとって海は特別だったし、沖縄の海ともなれば、それはまた格別なのだろうと思っていた。先輩は、海でやったバナナボートが特別に楽しかったと言っていた。絶叫マシーンは苦手だったが、海だし、ライフジャケットがあれば溺れないだろうし、バナナボートはきっと楽しいはずだと心を躍らせていた。楽しみすぎて夢にも出てきたくらいだった。でも、私たちの学年は、バナナボートをしなないことになったと聞いた。

中学生の時、同級生に持病のある子がいた。激しい運動は難しく、体育も休むことがあった。その子への配慮もあったのだから、

特に理由が言われた訳ではなかったが、みんな何となくそうなんだとわかっていた。正直、夢に出てくるほどバナナボードを楽しむにしていた私にとって、バナナボートがなくなったことはショックだった。でも、沖縄に修学旅行にまで行って、体育の授業みたいに『バナナボートは見学で』いうのもなあ〜、とも思った。とは言え、ショックだったのは違いなかった。私たちの学年は、バナナボートの代わりに三つくらいのプランから好きなものを選んで、それに参加するプログラムが組まれた。私は、海に行きたかったこともあり、あまり人気はなかったものの、海岸で貝やサンゴ礁を拾って、写真立てを作るプランを第一希望にした。もちろん希望は通り、それに参加することになった。

修学旅行の一週間前くらいから天気予報をいつも以上に気にするようになった。なぜなら、修学旅行と季節外れの早すぎる台風がドンピシャにかぶっていたからだった。毎日、台風がどこかに行かないか、消えてしまわないかと願っていたものの、それは中途半端な私たちでしか叶わなかった。修学旅行の二日目までは台風が来ているものの、それ以降は通りすぎるであろうという予報になり、ほぼその通りになった。写真立て作りも、天候によっては準備してもらった材料で作ることになるかもとなっていた。ただ、幸いにも雨は小雨で、淀んだ海の砂浜でサクッと材料を集めて写真立て作りは始まった。一応、幸いにもということにした。自分なりにこだわって作ったものの、根本的にセンスがないため、みんなが作ったものより少しだけ残念な写真立てが完成した。母親へのお土産になったが、も

ちろん好評を受けることはなく、結構早い段階でどこかに追いやられた気がする。

修学旅行から帰って来てからもバナナボートに対する残念さは残っていた。ただ、あの日程だったら結局できなかったなと思うことで納得できる自分もいたが、そう思えない自分もいて、残念さと言うよりわだかまりのようなものが残っていた。

「みんなにとって良い選択」なんて難しいのかもしれない。でも、「自分にとって良い選択」は、出来るのかもしれない。簡単ではないかもしれないけど、後者の方がまだ現実的な気がする。ただ、「自分にとって良い選択」が誰かのそれとは違う場合、それはそれでしっかりこないのかもしれない。

～ 終わりに ～

本当は、もういくつかのエピソードがあったのだが、今回は時間切れ。いつも通り提出が遅れてしまった。

小さい頃から色々なことに触れてきたのだな～と、改めて思う。もちろん、どれも今の私につながっているのだけど、どれもが上手く言葉に出来ない部分がある。

今回のマガジンの副題は『グラデーションの中で』にした。全部書き終わってから付けた副題だ。白黒つけられる物事ばかりではないけど、白黒つけられてしまう物事もあり、白黒つけておいた方が、つけられていた方が都合の良いこともあるように思う。苦手で、不得意で、嫌いで、困ることや不便なこと、嫌なことばかりではないけれど、‘でもな～’と思うこともある。綺麗ごとでも偽善でもなく、事実、現実はやっぱりある。なくなならないことだってあるし、

中には減らせるものもあるように思う。でも、なくなった方が良いことばかりではないと思うし、減れば良いと言うものばかりでもないと思う。

上手く言えないが、無理して上手く言う必要もなく、大切に言葉にしながらかえられるようになれば良いなど、改めて思った。

👣 おくのほそみちのこれまで 👣

第 24 号 新連載決意表明

(「執筆者@短信」にて)

第 25 号 リハビリテーションのこと

第 26 号 ‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に

第 27 号 ‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に

二歩目;〇〇〇と私

第 28 号 ‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に

三歩目;‘あなたー私’という 関係 によって変わる‘場’

第 29 号 選ぶということ

一歩目;私の内にある‘絶対’

第 30 号 選ぶということ

二歩目;理学療法士として①

第 31 号 在宅医療について

第 32 号 選ぶということ 三歩目;生き場

第 33 号 理学療法士が指圧を学ぶ